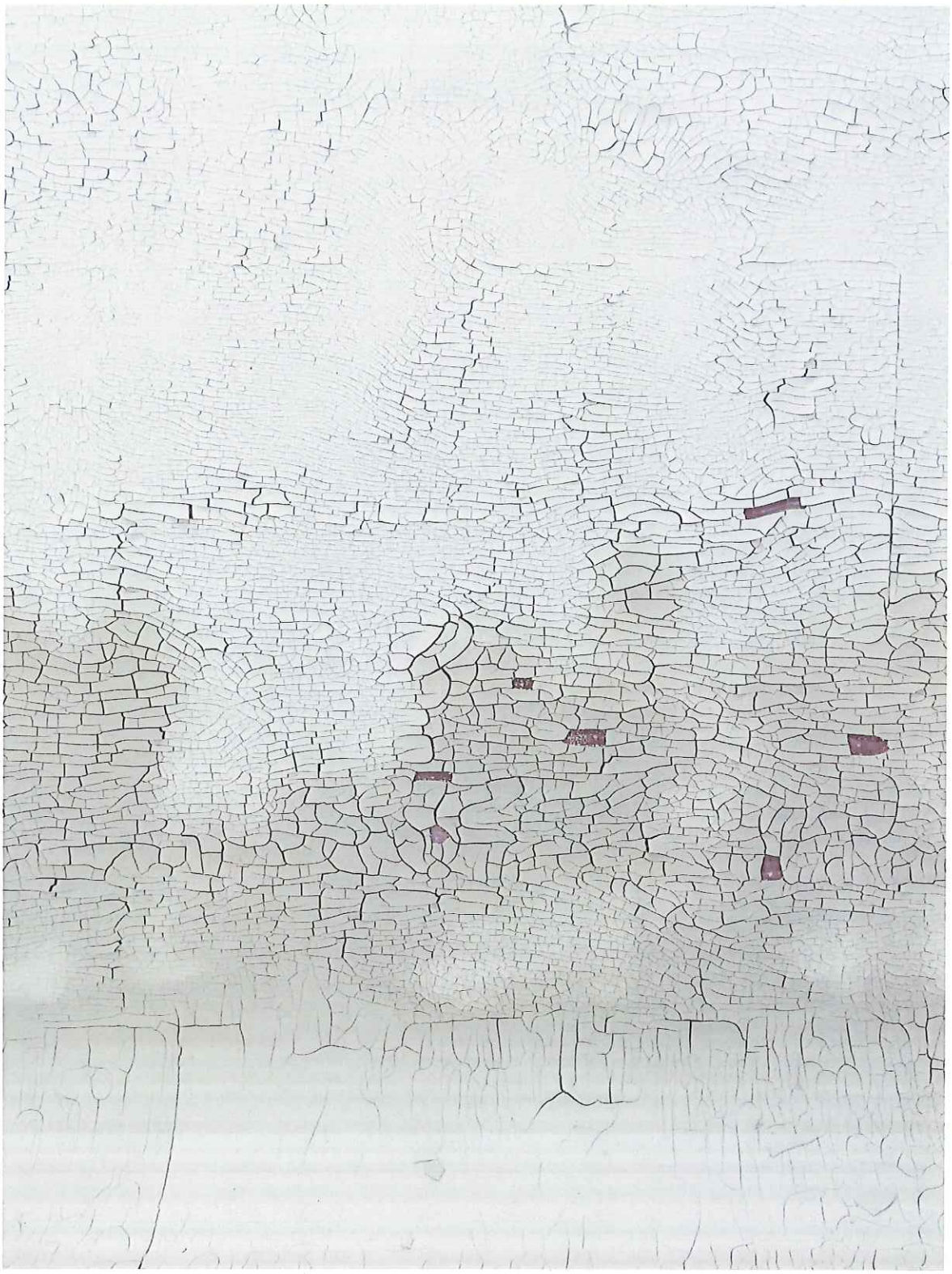
第57回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展
日本館キュレーター指名コンペティション

企画提案書

提案者 | 片岡真実 | 森美術館チーフ・キュレーター

出品作家 | 篠田太郎



01 | 展覧会の基本構想

抽象的な時空としてのヴェネチア・ビエンナーレで美術の本質的な価値を問う

ヴェネチア・ビエンナーレは、世界最大のアート・フェスティバルであり、各国が国策としての現代美術を競う場でもあるが、120年以上の歴史を俯瞰してみると、そこで展示されてきた作品群は、それぞれの時代の政治的、経済的、社会的な世界情勢を反映するものであり、ビエンナーレはそうした世界と対峙する時空でもあった。1970年には賞制度が廃止され(1986年に復活)、1974年には開催自体が困難となり、ドクメンタとの比較においてもビエンナーレ自体の存在意義が危機に直面した時代もある。

しかしながら、非欧米圏における経済新興国の隆盛や現代美術を取り巻くエコロジーのグローバル化に伴い、近年では再び世界的な注目を浴びる一大イベントとして、確固たる位置づけを回復していると言えるだろう。2015年の第56回に参加した89のナショナル・パビリオンでは4館が初参加だったが、2013年にも10カ国が初参加している。また、2015年、芸術監督オクウィ・エンヴェゾーによるメイン展「All the World's Futures」にも53カ国から136名が参加。2003年には約26万人であった総来場者数も、2015年には50万人を超え、この10数年で飛躍的に増加していることがわかる。

日本は1952年にヴェネチア・ビエンナーレに初参加し、1956年には自前のパビリオンをジャルディーニ公園内に有している。日本美術界としては、ヴェネチアは長らく世界あるいは欧米の評価に挑む場、国内評価と国際評価の矛盾に直面する場でもあった。1990年代以降、世界各地でさまざまなビエンナーレ、トリエンナーレが創設され、それぞれの地域における政治的、社会的、文化的なサイト・スペシフィシティが起点となってきたが、ことヴェネチア・ビエンナーレに限っては、逆にヴェネチアやイタリア、あるいは欧州という地政学的な文脈から離れ、むしろ美術の本質的な価値を問い直すための、極めて抽象的、匿名的な時空へと移行しつつあるように思われる。そこでは全体像の掌握や画一化された価値の不可能性、予測不可能性などが、不安定化、複雑化、複層化する世界の価値観の縮図として描き出されるのである。

とりわけ中東から拡大している新しい難民・移民問題は、トルコ、ギリシャ、イタリア、ドイツをはじめとする欧州全体を包み込み、経済共同体としてのEUの存在意義を含め、グローバルな地政学に新しい課題を投げかけている。このことは2017年のヴェネチア・ビエンナーレでも不可避な課題になると想像されるが、そこでは現代美術という共通言語を通して、近代文明や民主主義を含む世界の在り方が問われることになるだろう。ただ一方では、それはまた、美術の持つ本質的な価値を再考する場となるとも考えられる。

今日の日本は、2011年の東日本大震災、福島原発問題などを経て、自然環境、国際関係、政治経済など多様な視点から極めて脆弱、不安定かつ予測不可能な状況が国の底辺に浸透している。そうした状況からヴェネチア・ビエンナーレという場で、世界に向けてどのような態度を示すことができるのか。そこでは、日本固有の課題に言及するだけではなく、それを含めた現代世界の課題、あるいは解決不可能性を抽象化し、そこから世界が共有できるヴィジョンと概念を提示すること、あるいは少なくともそのための思考の場の提供が求められていると考える。

02 | 出品作家

篠田太郎 | 1964年生まれ

選定理由

篠田太郎は、銀閣寺の向月台に触発されて日本の造園を学び、その思想と技術を発展させた、よりコンセプチュアルな空間を創出するサイト・スペシフィックなインスタレーションで、現代アーティストとしてのキャリアを蓄積してきた。彼の関心は森羅万象のすべてに関わり、宇宙の秩序、科学と人類の営み、自然と人間の営みとの関係への提案が、作品ごとに異なるメディアを通して表現される。その視点は、日本庭園を縁側から眺めるように、観察者として世界を俯瞰し、思考もしくは瞑想するような位置にあり、多くの場合、観客にもそうした空間が用意される。

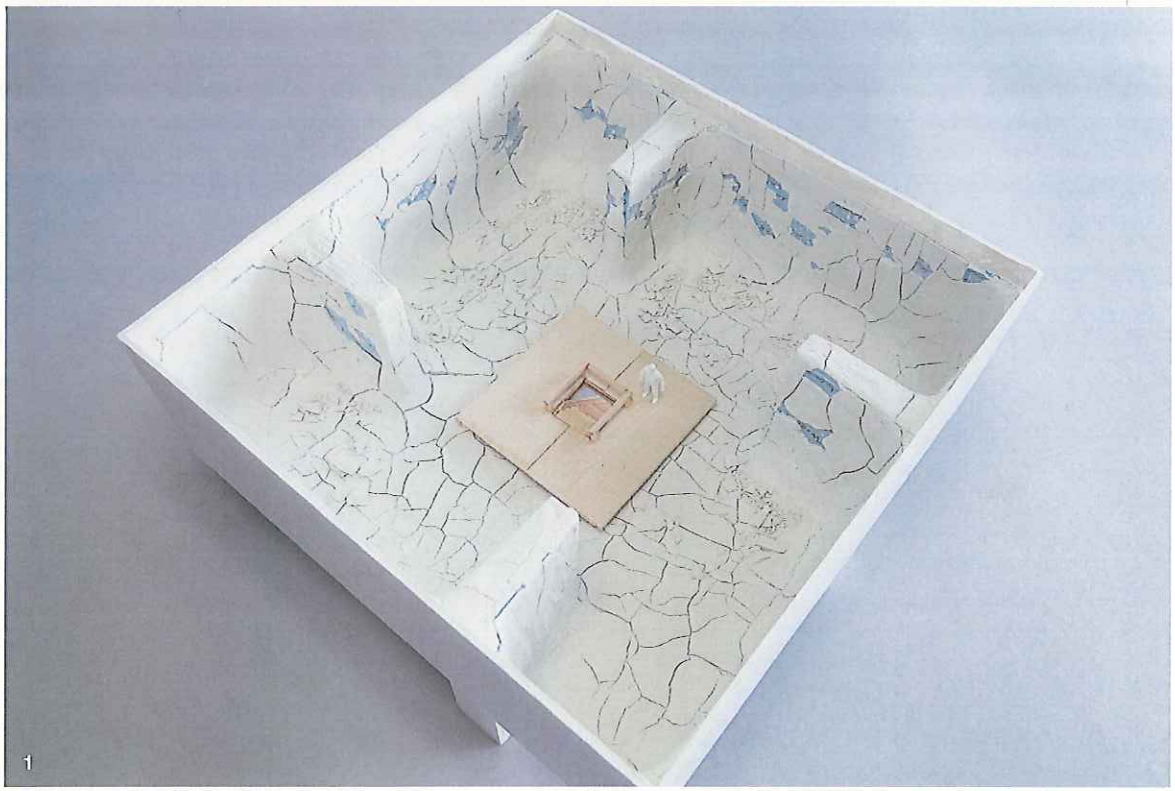
1990年代後半に始まる篠田の仕事は、国内では2010年、森美術館での「ネイチャー・センス展：吉岡徳仁、篠田太郎、栗林隆——日本の自然知覚力を考える3人のインスタレーション」での新作インスタレーション及び映像インスタレーション、2013年「日産アートアワード：ファイナリストによる新作展」での新作映像作品などが近年見られてきた。ただし、この数年は日本国内よりもむしろ海外で発表される機会が多く、2015年の「第12回シャルジャ・ビエンナーレ」、2016年の「第20回シドニー・ビエンナーレ」などで見せたサイト・スペシフィックなコミッション・ワークでは、極めて高い評価を得ている。

シャルジャの新作はシャルジャ美術財団があるヘリテージ・エリアに制作した《枯山水》[p.6]。藍に染めた幔幕で空間を囲み、中央に二つの逆円錐状の凹みがある庭を制作した。その凹みは砂地の底に開けられた直径8mmの穴から砂が流れ落ちることで次第に拡大し、観客は縁側からその枯山水の変化を眺める。砂漠の地で敢えて枯山水を制作したことについて篠田は、「(シャルジャの)砂丘で感じた偉大な自然の流れを再現したかった。僕は人為的に穴を開けるのですが、砂が穴を通って落ちる、砂が円錐を造る、砂が流れる、などは地球の物理的なものであり、ある意味自然現象です。そしてそれは美に通じています」と述べている。一方、《困惑の抽象》と題されたシドニーの新作[p.7]は、ユリカラという先住民コミュニティを訪れた際の経験と困惑に触発されたもので、10メートル四方、天井高8メートルの空間の壁面に塗りこまれた白泥が徐々に乾燥し、ひび割れ、床に剥落していく過程を、観客が四畳半のプラットホームから眺めるもの。喧騒のなかでのビエンナーレ体験は、観客にとってはしばしば情報過多で消化不良にもなりうるが、現在も開催中のシドニー・ビエンナーレでは、「静的な場、多量なアクティビティのなかでの瞑想のための空間」(The Sydney Morning Herald)として最も注目される作品のひとつとなっている。

与えられた場の空間的、歴史的、概念的な文脈を一旦咀嚼しながら、その場での体験を身体感覚的、精神的な意識レベルへと転換する篠田のインスタレーションは、我々人類にとってもはや抽象化してしまった世界との関係性や他者との通路の回復を、静かに模索するものでもある。

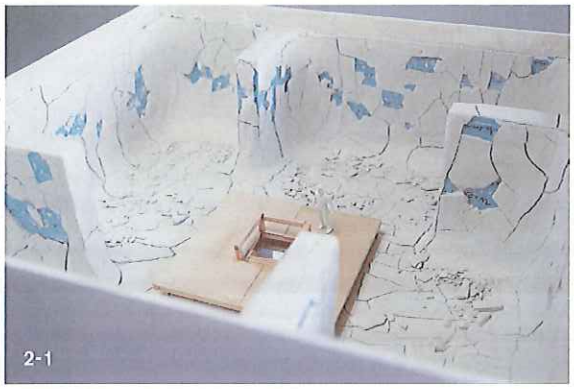
「第57回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」への提案は、今日の世界を取り囲む不可能性への抽象的な応答として、抽象的な時空としてのヴェネチア・ビエンナーレで改めて美術の本質的な価値を考える場を、サイト・スペシフィックなインスタレーションとして依頼したい。とりわけ、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館という独特な建築空間を、建築家・吉阪隆正の当初の設計意図にも呼応するかたちで活かしつつ、欧米中心の現代美術の発展を追ってきた空間を、美術の本質を見つめる抽象的な空間へ転換することを試みる。そこには、自然現象への畏敬と人為的操作の不可能性、森羅万象の宇宙へ馳せる想い、諸行無常的な価値観、そして世界の合理化や言語化の不可能性などが、空間体験のなかへ象徴的に編み込まれる。

03 | 想定される展示



1

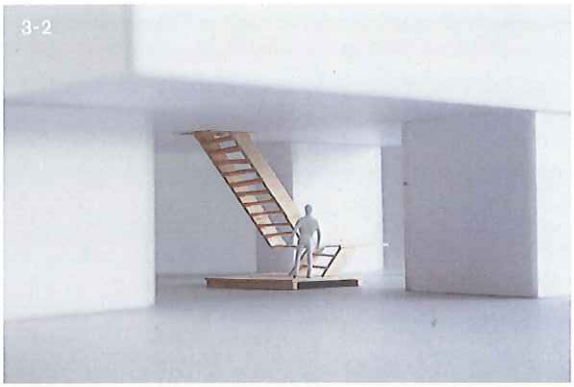
1. ヴェネチア・ビエンナーレ日本館の内壁全体、ならびに四枚の展示壁の垂直面全てに、小説一冊分のテキストを貼り込む。テキストは、最終決定ではないが、安部公房の『壁(S・カルマ氏の犯罪)』、あるいは『壁(バベルの塔の狸)』などを検討中。同小説は1951年に刊行されており、日本のヴェネチア・ビエンナーレ初参加(1952年)、日本館建設(1956年)と時期を同じくする。当時からの時間の経過、価値観の変化を再考すると同時に、小説の抽象性、隠喩などをテーマに重ね合わせている。
2. 上記の壁面および床面全体を、粘土素材の左官で覆う。建築空間の天井以外の全ての内角はアール加工する。
   粘土は大理石粉を原材料として使用することを検討したい。大理石の使用は、イタリアおよび西洋の代表的な彫刻素材としての価値観、日本の美術教育における初期段階でその石膏複製像から学ぶという慣習、さらには現在の日本パビリオンの外壁にも大理石粉と石灰を混ぜたマルモリーノ(イタリア漆喰)が使用されていることなどへの言及である。
   壁面に塗布された粘土は、その場の温度、湿度などローカルな気候風土を反映しながら徐々に乾燥し、美しい自然現象としてのヒビ割れ模様を創出、さらに部分的には剥落していく。
   部分的に剥落した箇所から、徐々に下地のテキストを覗き見ることができると想定する。

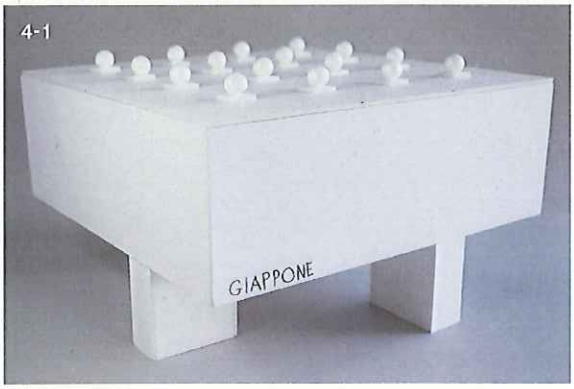


2-1

2-2

3. 日本館の通常の出入口は閉じて、矩形の空間を再現する。一方で、観客は床の中央にある開口部をメインの出入口として、階下のピロティ部分から階段で昇降する。階段を上ったところには、幅約2.5メートルのプラットホーム(縁側)が四方に作られ、観客はそこから壁面を眺める。
4. 空間の照明には、太陽光採光システム「ひまわり」を用い、既存の電力等は使用しない。したがって、空間の明るさは、それぞれの日の天候に左右される。自然光の使用は、福島原発事故以来の課題である我が国のエネルギー政策、地球全体の課題としての環境問題への言及でもある。





04 | 想定される予算

作品制作費	内部プラットホームおよび階段部分施工費、壁面加工制作費、左官作業費ほか	2,000万
輸送費	太陽光採用システム	(協賛想定)
関係者旅費	作家、キュレーター渡航費、滞在費	300万円
広報費	国際広報費	300万円
カタログ制作費	翻訳、デザイン、印刷	400万円
現地管理運営費	光熱費、警備、現地コーディネーター費等	1,000万円
合計		4,000万円

*上記に加えて、助成および企業協賛等も想定する

05 | 参考写真①

2015年「第12回シャルジャ・ビエンナーレ」出品作《枯山水》

05 | 参考写真②

2016年「第20回シドニー・ビエンナーレ」出品作《困惑の抽象》

06 | 作家略歴

篠田太郎 | 1964年生、東京都出身、東京在住

個展

2012 「ホモ・サピエンス・サピエンス」、タカ・イシイキャラリー、東京
2009 「Lunar Reflections」、イザベラ・スティワート・ガーデナーミューシアム、ホストン
2005 「Buried Treasure」、REDCAT、ロサンゼルス
2003 「ヘリコプター」、GALLERY SIDE2、東京
2002 「ゴッドハンド」、広島市現代美術館、広島
2001 「4S Super Surround Sex System」、GALLERY SIDE2、東京
1999 「アヤコ・ミディアム・トモコ」、レントケンクンストラウム、東京
「エヴォ2000」、三菱地所アルティアム、福岡
1998 「リザード」、レントゲンクンストラウム、東京
「ミディアム」、現代美術館・名古屋、愛知
1997 「ケーブマン」、レントゲンクンストラウム、東京

主なグループ展、国際展

2016 「第 20 回シドニー・ビエンナーレ：The Future is already here – it's just not evenly distributed」、シドニー
2015 「Sun Light/Star Light Contemplations on the Solar Orb」、ルイジアナ・アート＆サイエンス・ミュージアム、米国
「第12 回シャルジャ・ビエンナーレ：The past, the present, the possible」、シャルジャ、アラブ首長国連邦
2014 「六本木アートナイト2014」、政策研究大学院大学、東京
「Taking Time」、Sheldon Museum of Art、ネブラスカ州リンカーン
2013 「堂島リバービエンナーレ2013：Little Water」、堂島リバーフォーラム、大阪
「日産アートアワード」（ショートリスト）、BankArt Studio NYK、横浜
2011 「Sculpture Garden (Collabrative Project) : Kaz Oshiro, Taro Shinoda」Las Cienegas Projects, ロサンゼルス
「2011 アジア・アート・ビエンナーレ」、台湾国立美術館、台中
2010 「ネイチャー・センス展：吉岡徳仁、篠田太郎、栗林隆」、森美術館、東京
「Transparena」、ローマ現代美術館（MACRO）、ローマ
2009 「The First Stop on the Super Highway」、ナムジュン・パイク・アートセンター、韓国
「プラットホーム、ソウル 2009」、Kimusa、ソウル
2007 「第10回イスタンブール・ビエンナーレ」、イスタンブール、トルコ
2006 「釜山ビエンナーレ2006」、釜山、韓国
2005 「GUMDAM 来たるべき未来のために」、サントリーミュージアム天保山、大阪
「八谷和彦・篠田太郎・石川直樹「SKY-HIGH」（スカイハイ）」、KPO キリンプラザ、大阪
2004 「Living Together is Easy」、水戸芸術館現代美術ギャラリー、水戸
「六本木クロッシング2004」、森美術館、東京

2003　「Time after Time: Asia and our moment」、イェバブエナ芸術センター、サンフランシスコ

2002　「アンダーコンストラクション：アジア美術の新世代」、東京オペラシティアートギャラリー／国際交流基金フォーラム

「Centre of Attraction：第8回国際バルティック・トリエンナーレ」、ビリニュス、リトアニア

2001　「第1回横浜トリエンナーレ」、横浜、神奈川

「ネオ東京」、シドニー現代美術館

「先立未来」、ルイジペッシ現代美術センター、プラトー

1999　「知覚の実験室」、佐倉市立美術館、千葉

1998　「Seamless」、デ・アペル、アムステルダム

1997　「拳2」、レントゲンクンストラウム、東京

「O」、レントゲンクンストラウム、東京

1995　「アートは楽しい：機械帝国」、ハラ・ミュージアム・アーク、群馬

「POOL2」、レントゲン藝術研究所、東京

以上